

No. 385【2019年12月6日配信】

浅虫地区の水道 明治・大正編 (担当:鈴木)

こんにちは！ 嘱託員の鈴木です。今回も水道にまつわるお話です。

青森市と同様、東津軽郡野内村の一部だった浅虫地区も飲料水に使える井戸が少なく、人々は水の問題に苦慮していました。

明治29年(1896)、浅虫の鳴海兼吉ほか有志により、川の水を木樋で引いた簡易な水道がつくられ、さらに明治41年には、青森市の水道技師の協力を仰ぎ、村の予算と住民等の寄附によって、この水道が大改修されました。

水道の水源には浅虫川上流の泉水が用いられ、貯水池に入れられた水を鉄管で地区内に置かれた水槽に導水し、そこから共同で利用します。水槽は木製で、下部のコルク栓を開閉して水を汲み、ときどき底部の木栓を開けて掃除しました。この水槽は、椿館前、裸湯前(現浅虫町民会館附近)、駐在所前(国道沿い)、東奥館前(浅虫駅近く)の4か所に置かれました。

しかし、この水道も数年で鉄管が腐食し始め、また温泉を訪れる客がどんどん増えて水が不足してきた上に、衛生や防火の面からもさらなる改修が必要との話が出てきました。

そのうえ、大正6年(1917)9月30日から翌10月1日にかけて、青森県を襲った暴風雨によって水源地が崩れ、とりあえず応急処置でなんとかしのいでいました。

そこで、野内村は東郡に1,000円の補助を申請し、村からの補助金500円のほか公債と村民からも寄附も募り、水道の改修に取り組むことになりました。温泉客が増加し、修学旅行や団体客も訪れるようになってきた浅虫温泉の発展のためには、水道問題は死活問題であるとして、大正7年8月には村内から11名の水道委員を任命し、実地調査を行うなど工事の準備を進めました。

しかし、なかなか工事の着手に至らず、同年9月9日付『東奥日報』記事では、その年の夏から札幌・小樽で開かれた「開道五十年記念北海道博覧会」の帰りに浅虫に立ち寄る客で賑わっており、浅虫温泉を天下に紹介する絶好の機会なのに、なぜ関係者は水道改修等の設備を整えなかったのかと書いています。

そして、ようやく秋に発注した木樋が12月に到着し、大正8年の1月に工事請負の入札が行われ、水源地から椿館前の水槽までの第一期線は4月末に、椿館から東奥館までの第二期線は6月末に完成したのでした。

ただ、これもまだ簡易なものにすぎず、水源も変わらなかったため、根本的に水量は十分ではなかったため、のちに新たな水道敷設計画が持ち上がるのです。



東奥館(大正末期、青森県所蔵県史編さん資料)

※今回のトリビアは『東奥日報』記事、
『青森市水道六十年史』等を参考にしました。